

# 課題乗り越え届く音楽

## 人をつなぐ

新型コロナウイルス感染症の流行は、音楽との関わり方に大きな変化をもたらした。しかし、音楽に親しむ気持ちはいつの時代も変わらない。今回は音楽イベントや楽器演奏の魅力、感染症との共存、健康への活用などの観点から音楽について考える。

## 吉祥寺音楽祭 地域の文化伝える

吉祥寺は文化の街と呼ばれている。その代表がジャズやフォークソング、ロックなどの音楽だ。吉祥寺音楽祭では吉祥寺に根付く多様な音楽の良さを伝え続けている。10月17日には、このイベントの一つである「吉音コンテスト vol.20 決勝大会」が吉祥寺シアターで行われた。

### ▼吉祥寺音楽祭の内容と歴史

本音楽祭は公園コンサート、ジャズコンサート、吉音コンテスト、吉音スーパーステージの4つを中心に行われている。今年で36回目を迎えた本音楽祭は1986年に始まった。当時の商店会の若手メンバーたちから、吉祥寺を文化で盛り上げるイベントをつくりたいという意見が集まったことが開催のきっかけだ。

その後、イベント内容の大きな変更を二度実施している。一度目の変更は1990年の第5回だ。当時吉祥寺でジャズ喫茶を営んでいた実行委員の提案で、ジャズを中心にイベントを開催するようにになった。2002年の第17回では二度目の変更を実施。商店会の代表を含む実行委員の意見により、ジャズだけでなくフォークソングや

ロックなどのさまざまな音楽ジャンルを織り交ぜて開催するようになった。その結果として生まれたのが、吉音コンテストだ。吉音コンテストには音楽ジャンルの制限がない。決勝大会に進出し優勝した団体は、むさしのFMで1年間ラジオ番組に出演したり、翌年5月に吉祥寺駅北口駅前広場で行われる吉音スーパーステージで演奏したりすることができる。来場者にとっては、演奏を聴くことに加え、好みのミュージシャンを見かけられることも楽しみの一つだ。

### ▼コロナ禍による影響

コロナ禍は本音楽祭に新たな変化をもたらした。従来、本音楽祭は4～5月に開催していたが、昨年は緊急事態宣言が発令されたため中止に。吉音コンテストのみ開催を延期し、ローカル番組やYouTubeでの放送を行った。

実行委員長の三次耕平さんは「この過程で、本音楽祭がインターネットを使った広報に弱かったことに気付いた」と話す。それまではポスターやチラシなどの配布物を利用しており、本音楽祭のホームページはあまり認知されていなかった。そこで、新しいホー

プラットフォームを介して配信され、利用者はどこからでも視聴できる。演奏者の希望によってはアーカイブ映像も視聴できるようにしており、ライブが終わった後に楽しむことも可能だ。

ライブ配信ではコメント機能を使用できるため、視聴者同士のコミュニケーションが促進。視聴者が演奏者に直接感想を伝えられるようにも変化した。また、ライブ中に演奏者にお金を送る「投げ銭」機能は、演奏者にとってはチケット代金に加わる新たな収益となった。

ライブ配信は感染症対策としてだけでなく、平時においても利点のある取り組みだ。同スタジオは、ライブ配信を「生の演奏には勝てない」としつつも、ライブ当日に来場できない場合をはじめとする需要がある限り、続けていく方針だ。ニーズに合わせてかたちを変え、いつも私たちのそばにある音楽。その裏側にある現場の人たちの努力を忘れてはならない。(川船英紀)

能動的な方法では、使用する曲のジャンルはさまざま。楽器も療法を受ける人に合ったものを選択しており、好みの音色はもちろんのこと、働かせたい体の機能に応じて打楽器や鍵盤楽器などの種類を使い分ける。

現在では子どもの発達支援に加え、認知症や痛みの緩和などにも効果が認められ、教育や医療、福祉など多くの現場で活用されている。音楽療法の会武蔵野では、能動的な方法で音楽療法を行う。子どもに対しては、楽器演奏や体操など身体活動を含む音楽療法を提供。一方、高齢者には歌唱をはじめとするグループ活動を中心に行うなど、対象によって異なる方法を採用している。

音楽療法は音楽療法士がいることによってはじめて成立する。しかし、現



ムページを作成し、今年10月に公開。本音楽祭に親しむを持ってもらうため6月から「キチオン」という愛称を付けたことと併せ、幅広い広報活動を行っている。

三次さんは「出演者は本音楽祭を通して、公園や駅前などの特別な場所で普段とは異なる演奏ができる。そうした演奏が来場者にとっての感動にも結び

付いてほしい」と熱く語った。音楽イベントは全国各地で行われるよう変化しており、本音楽祭が生き残っていくためには新しい挑戦をする必要がある。今後は井の頭恩賜公園全体を使ったイベントや、地域のライブハウスと協力したイベントを開催しようと考えているそうだ。本音楽祭の動向に注目していきたい。(飯塚大賀)

## ジャズ生演奏 魅力変わらず

デジタル機器で手軽に音楽を楽しむ人が多かった今、生の音楽を体感する機会は減っている。その中で、コピス吉祥寺近くにあるジャズクラブ「SOMETIME」は開店以来、生演奏を貫いてきた。

同店は、ジャズ特有の「敷居の高さ」を感じることなく誰でも気軽に来店できる空間を目指し、1975年に開店。ジャズを聴きながらリーズナブルな価格で食事をする事ができる。マネアックな演奏スタイルは扱わないようにしているため、ジャズに詳しくない人でも楽しめる。

同店の最大の特徴は、生演奏を行っている点だ。活躍中のミュージシャンを店に招いており、国内のみならず国外のミュージシャンが演奏することもある。また、ライブスペースは店内中央にあり、その周りに食事ができる席が配置されている。演奏者の背中側から見ることのできるため、ピアニストの運指をはじめとした一般的なライブでは見えない部分まで目に見ることができ。開店当初から変わらない内装も好評で、雰囲気を楽しむために来て

在音楽療法士の数は少なく、民間資格であるため認知度も低い。藤本さんは「音楽療法を受ける人のためにも、国家資格として認定されることを目指している」と語る。音楽療法士が増えることで、多くの活用法がある音楽療法をより広く利用できるようになってほしい。(石井涼雅)



音楽療法の様子

いる客もいるほどだという。特にロフト席は、初めて来店する人にもお薦めだ。

新型コロナウイルスの影響を受け、同店も一時は休業や時短営業を強いられた。しかし、ミュージシャンの居場所を絶やさないようにするため、クラウドファンディングを経てライブを再開。多くの支援を受けたことに対し、店長の宇根裕子さんは「愛されている店であることを実感するとともに、今後も店を続けていかなければならない」という使命感を持った」と振り返る。開店当時に比べてジャズクラブの数は減っているが、全身で音楽を体感できる魅力は変わらない。ジャズや生の音楽を体験してみてもどうだろうか。(一カ聖司)



SOMETIME の店内

## 編集後記

ラジオやCD、ストーリーミングサービスなど、技術の発展は音楽を手軽なものにした。今や街中で、イヤホンを着けている人を見ない日はない。今回はそんな身近な音楽について特集した。音楽は単なる娯楽ではなく、地域を活性化させる側面も持っている。吉祥寺音楽祭をはじめとするイベントは、かたちを変えながらも継承され続けてきた。音楽イベントの開催にあたっては、演奏者やライブ配信の運営者なども工夫を重ねている。また、普段とは異なる音楽ジャンルを楽しむためにも多様な手段がある。「敷居の高さ」を感じさせないジャズクラブに立ち寄り、アーティストや楽曲について知

## 演奏に見つける 自分なりの楽しさ

クラシック音楽をはじめとする演奏会で完成された音色を聴くことだけでなく、楽器を自ら演奏することにも楽しさがある。そこで、演奏の魅力について本学管弦楽団のコンサートミストレスでバイオリン奏者の寒河江旭代さん(現代社会3)、学生指揮者でありトロンボーン奏者の鈴木智也さん(政治3)に取材した。

同楽団では、夏と冬に年2回開催する演奏会を活動の軸としていることに加え、樺祭のオータムコンサートなどでも発表を行っている。目標には「成長を楽しむ!」を掲げ、互いに高め合いながら日々練習に励んでいる。時には、音楽への思い入れ故に団員間の衝突も起きる。しかし、そうした困難を乗り越えることがより良い演奏につながり、思い出しして笑い合えるほどにまで仲も深まる。

寒河江さんは、自分の好きな曲を思い通りに弾けるようになった時はもちろんのこと、仲間と練習を重ねて曲を完成させていく過程が演奏の魅力だと考えている。さらに、演奏会において自分たちの熱量が観客に伝わり「会場全体が一つになっていた」といった感想をもらうこともうれしくなるとい

う。「現代の自分たちが数百年前の人々

を熱狂させた音楽に触れられることが、演奏の何よりの尊さであり、魅力だ」と語るのは鈴木さん。「オーケストラ」という一つの音楽ジャンルの中でも、時代や作曲家ごとに注目すると新たな発見がある。19世紀に活躍したブラームスの譜面には、ベートーベンの曲に登場するフレーズやパッサの曲に見られる旋律が隠れている。作曲家たちが楽器に込めた仕掛けや先人に向けた尊敬の気持ちに気付くと、演奏することがさらに楽しくなる。

2人は「楽器には、その種類や演奏者次第でさまざまな音色を奏でられる奥深さがある」と口をそろえた。演奏会に向けて日々練習に励む同楽団も、演奏の楽しさがモチベーションにつながっているのだろう。楽器を手に取って、自分なりの演奏の楽しさを探してみてもいかがだろうか。(万浪耀)



6月の演奏会

## フェス 音楽や仲間との出会い

大勢の人が集まり盛り上がる、音楽フェス。コロナ禍で大規模なイベントの実施が難しい現在でも開催を望む声があるからだろう。今回はそんなフェスに着目する。

フェスは、複数のアーティストの音楽を楽しめるライブ・エンターテインメントだ。日本においては1997年の第1回FUJI ROCK FESTIVALがルーツとされ、2000年ごろから広まった。通常のライブでは観客が1つのステージに集まるが、フェスでは会場内に点在するステージやフィールドで並行してライブを実施。参加者を楽しませるため、巨大なオブジェや足湯などが用意されることもある。

大きな特徴は「復習型」の楽しみ方であることだ。フェスでは特有のまつりとした雰囲気の流れ、当初の計画通りにライブを巡ることは難しい。そのため、何度か参加するうちに、見るライブをいくつか絞るようにすることが多い。目当てのライブがない時には盛り上がりしている他のライブを遠くから眺めたり、偶然通りかかったステージを見たりして過ごす。こうし

て参加者は、自分の知らなかったアーティストと出会う。これが、後日気に入ったアーティストのCDを聴いたり、ワンマンライブに行ったりするという「復習型」の楽しみ方につながる。

参加者の中には、フェスでライブを見る時は1人でも良いと考えているが、より充実した時間を過ごすため、旅や寝食を共にする「フェス仲間」をつくる人もいる。複数のライブが同時に進行するフェスでは、参加者間のつながりが薄くなりやすい。しかし、「フェス仲間」という小集団で感情を共有することで「フェス」という大きな集団につながっている感覚を得られる。参加者にとってフェス仲間は、アーティストと同等かそれ以上に重要な存在だ。

長らくフェスは歓声を上げることや観客の人数などの制限を受けてきたが、感染状況の好転に伴いイベントへの規制は緩和されつつある。今後、フェスに安心して参加できる世の中になることに期待を寄せたい。(梶原万穂)《参考文献》ロックフェスの社会学 個人化社会における祝祭をめぐって(永井純一、ミネルヴァ書房、2016年)

## ライブ配信 現場の努力あり

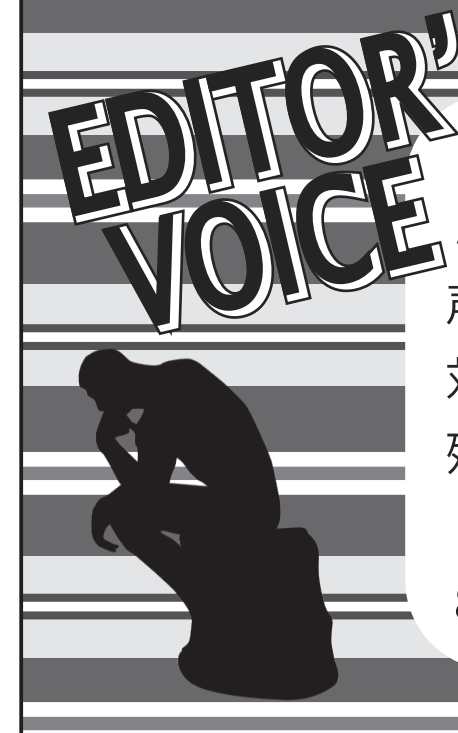
びあ総合研究所株式会社の「有料型オンラインライブ視聴に関する実態調査」によると、昨年18～69歳の約16.5%が音楽分野の有料型オンラインライブを視聴した。スタジオキッカ吉祥寺でも、昨年3月からライブ配信の事業を行っている。

同スタジオは、新型コロナウイルスの影響によるライブの減少とライブハウスへの収容人数の規制に悩まされていた。そこで、ライブをスタジオからインターネットで中継する取り組みを開始。運営元である株式会社アトヨンサウンドファクトリーの田村雄一さんは「ライブ映像や音源を映像化する事業は以前から行っており、そのノウハウを生かし配信に挑戦できた」と語る。ライブはYouTubeやVimeoなどの

## 音楽療法で健康を支援

音楽療法という言葉を知っているだろうか。これは、音楽の力と人との関わりを使って健康支援を行うことだ。そこで音楽療法について、日本音楽療法学会とNPO法人音楽療法の会武蔵野の理事長を務める藤本禮子さんに話を聞いた。

音楽療法は、音楽療法士の立ち会いの下で行われ、受動的な方法と能動的な方法に分かれている。受動的な方法は音楽療法士が付き添って音楽を聴く方法であり、能動的な方法は歌唱や楽器演奏、体を動かすなどの活動を指す。



対面形式の授業が徐々に増加し、キャンパスや本学周辺にも、友人と過ごす学生の姿が見られるようになりました。

3月31日に行われた現2年生の入学式の取材で、「高校生の延長線上から、やっと大学生になれた気がする」という声が上がったことは、いまだに私の心に強く残っています。入学以来制限のある学生生活を送ってきた1、2年生に対し、本学のいち先輩として、今後より充実した時間を過ごせるよう願います。卒業までの期間が短い3、4年生も、残された学生生活を楽しみ、それぞれに合った道に進むことができると信じています。

当会の現体制における最後の制作となる12月号は、12月20日(月)に発行予定です。当会に所属してきた3年8カ月、とりわけ編集人として過ごしてきた2年間で悔いなく締めくくります。(編集人 岡本和音)